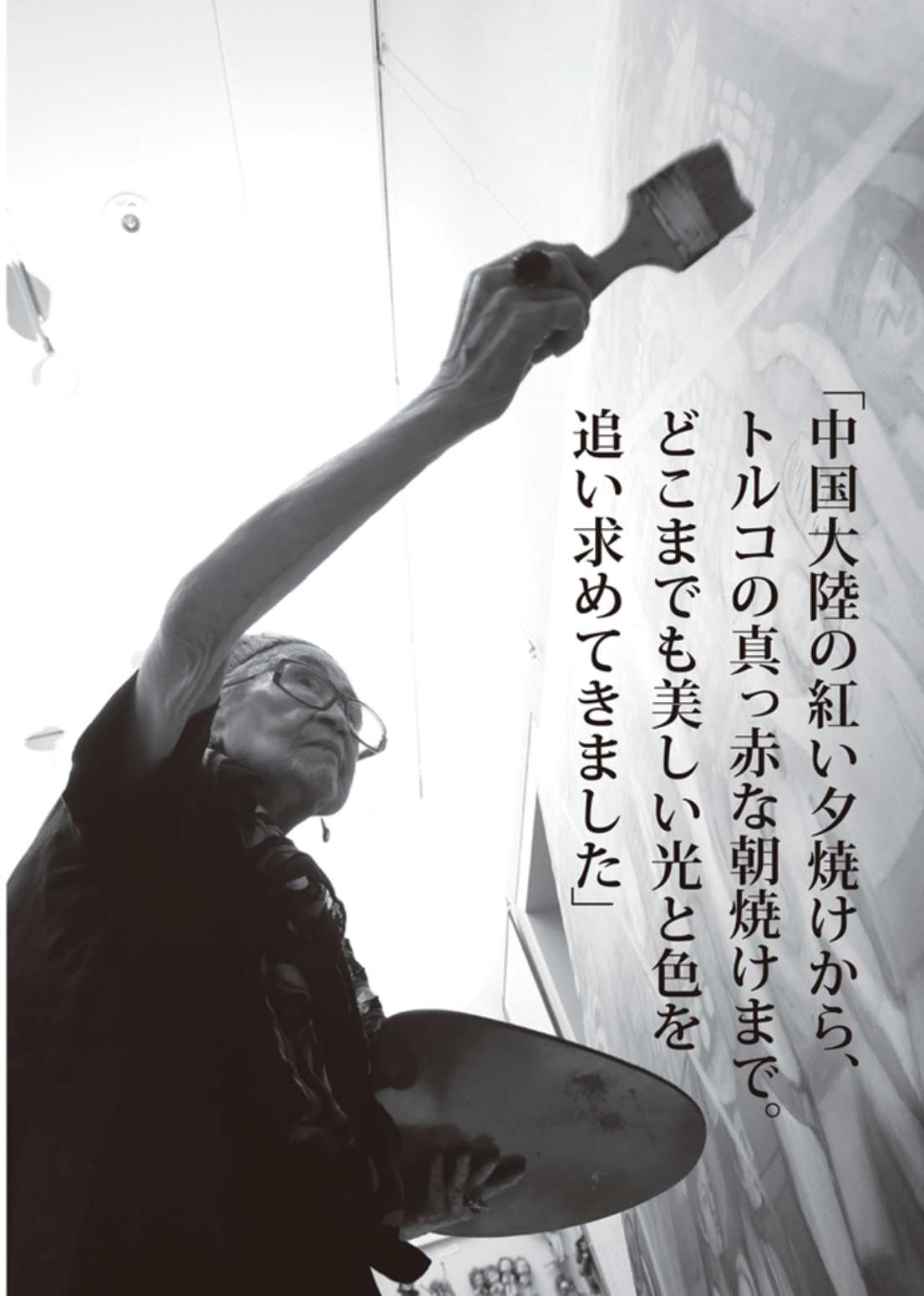




高松宮殿下記念世界文化賞授賞式で、2010年受賞者ソフィア・ローレンさんと。右は入江亨氏。(撮影/入江潔氏)

「日本人同士の方が
垣根を作ります。
感動は、人種を越えて
伝わるんです」

「中国大陆の紅い夕焼けから、
トルコの真っ赤な朝焼けまで。
どこまでも美しい光と色を
追い求めてきました」



都内の住宅街の一角。入った途端、異国の陽光と楽しい歌聲に包まれて、誰もが幸福な旅人になってしまふ。シルクロードの人々が、生き活きと描かれた彼女の美術館だ。三十代、石仏を題材に国内で旅を重ねた。その旅は、遙か西へと源流を遡る巡礼となる。五十代での初訪問以来四十年間、中国からイスタンブールまでの「絹の道」を巡った。チベット高原に踏み入り、幻の青いケシの群生に出会えたこともある。東西交流の歴史を辿る作品の数々は、彼女の冒険の歴史でもある。現地へは、画材の他に、重い録音機も持参した。帰国後、人々の歌や市場の賑わいを再生しながら、スケッチを大作に仕上げてきた。各地で巡り会えた感動を描き切るためだ。数年前、転倒し圧迫骨折に。病床で看護されるだけの身では駄目だと、転院した。リハビリに励み再び絵筆を手にする。九十三歳、不自由な身で実現したニューヨークの個展。描いた感動が、国境を越えて共感され、画家冥利を味わえた。冒険を網羅する展覧会を目標に、小柄な画家が、日々キャンパスに向かう。

入江一子（いりえかずこ）
大正五年（一九一六年）現韓国大邱生まれ。大邱高等女学校を卒業後、東京の女子美術（現・女子美術大）で学ぶ。林武画伯に師事。独立美術協会会員、女流画家協会委員（創立会員）。著書に「色彩自在シルクロードを描きつづけて」（二三五館）。

取材協力/入江二子シルクロード記念館入江潔氏、入江二子シルクロード記念館公式ホームページ inikazuko.com